豊見城市史
だより

第８号

2005

豊見城市教育委員会 文化課

目　次

豊見城における初期の海外移民
　　－『豊見城村史』の再検証を中心に－　　稲 福 政 斉 …… 1

豊見城市字与根の人生儀礼 －産育と婚姻－　　儀 間 淳 一 …… 17

編 集 後 記 …… 25

表紙について

ブナワン耕地における赤嶺亀次郎父子（昭和初期頃）

赤嶺夫保氏 提供

豊見城初のフィリピンへの渡航者、赤嶺亀次郎（字渡嘉敷出身）は当初単身で渡比したが、後に弟らを次々に呼寄せてマニラ麻栽培の事業拡張を図り、1916年（大正５）に「ブナワン赤嶺兄弟拓殖株式会社」を興した。亀次郎の長男である敬夫は東京の大学に学んだ後、職を得て満州へ渡った。

この写真は、敬夫が大学在学中に父のもとを訪ねた際のものと思われ、赤嶺兄弟が経営するダバオ・ブナワン耕地の麻山で撮影されている。右側で腕組みをして立っているのが亀次郎、左側の背広姿の青年が敬夫である。

豊見城における初期の海外移民
―『豊見城村史』の再検証を中心に―

稲 福 政 斉（市史「移民編」編集業務委託）

一　はじめに

沖縄は我が国屈指の移民県であり、それゆえ移民研究のさかんな地域でもある。県下の各市町村史にも多く「移民編」「移民・出稼ぎ編」等の巻が設けられ、さまざまな角度から市町村ごとの移民・移住・出稼ぎの諸相を解明し、大きな成果を挙げている。

豊見城市においても、2004（平成16）年度より本格的に『豊見城市史 第８巻 移民編』の編集作業に着手し、専門部会を発足するとともに、関係資料の収集、移民・出稼ぎ編刊行の先行市町村からの情報収集などを実施した。

豊見城市史において移民編を設ける理由は、移民編編集方針の「刊行の目的」において示されている。少々長いが煩を厭わずにこれを引くと次のとおりである。

> 『豊見城市史 第８巻 移民編』は、豊見城における移民・出稼ぎについての内容を収録するものである。
>
> 移民・出稼ぎの検証には、豊見城における移民・出稼ぎの開始時期や行先の推移、送出数、彼らが豊見城に与えた影響などを明らかにすることはもとより、このような現象を生み出した、当時の社会的背景にも目を向けることも必要である。これにより、海外移民・県外出稼ぎの送出母村としての豊見城の実相を知ることができる。
>
> また、生まれ育った地を離れて海外や県外に活路を求めた人々やその子孫が、それぞれの国や地域で辿った軌跡や暮らしの記録と検証は、成功者についてもそうでない人についても、等しく豊見城の先人たちの貴重な生活史として位置付けることができる。
>
> すなわち移民編は、移民・出稼ぎに関する諸相の解明を通じ、近代以降の豊見城の社会的経済的状況や人々の生活史の一端を解明することを目的として編集・刊行するものである。

これまでに世に出ている本市の移民に関する資料としては、豊見城村史編纂委員会編『豊見城村史』(1964年）がある。同書の第15章に「第５節 移民事業」の項が設けられ、移民・出稼ぎについて概説しており、これが豊見城全体の移民・出稼ぎ等についてまとめられた唯一のものといってよい。なお、『豊見城村史』は、編纂人の金城盛兼が全編にわたり一人で執筆したものである。

また、各字レヴェルでは『高安誌 上巻』(字高安誌編集委員会編 1999年)、『保栄茂ぬ字誌』（豊見城市字保栄茂字史編纂委員会編 2001年）などの字誌において各々の字ごとの移民・移住者の状況や名簿等が紹介されている。

現在、教育委員会文化課では、市史移民編の編集業務の一環として名簿類からの豊見城出身者抽出や移民関係文献資料からの豊見城関係記事の検索などを進めている。対象とするデータの量が膨大であるため作業はいまだ緒についたばかりという状況ではあるが、その中でも前出『豊見城村史』（以下、本稿においては「村史」という）の記事と、名簿や文献資料類から読み取れる豊見城出身者のデータとの間に若干の齟齬が見られることがわかってきた。また、村史においては取り上げられていない事項についても何点か見出すことができた。

そこで本稿では、現時点において市史係が収集した移民関係資料より抽出した豊見城出身者のデータをもとに、村史に紹介されている豊見城出身の海外移民の先駆者や代表的人物に焦点を当て、いま一度検証を加えていくこととしたい。

なお、村史をはじめ文献資料の引用部分において、縦組の原文を横組としたものは便宜上文中の漢数字を算用数字に改めた。また、明らかに誤植と思われる部分については筆者において訂正を加えたことを付記しておく。

二　豊見城における海外移民の開始

1．豊見城初の海外渡航者

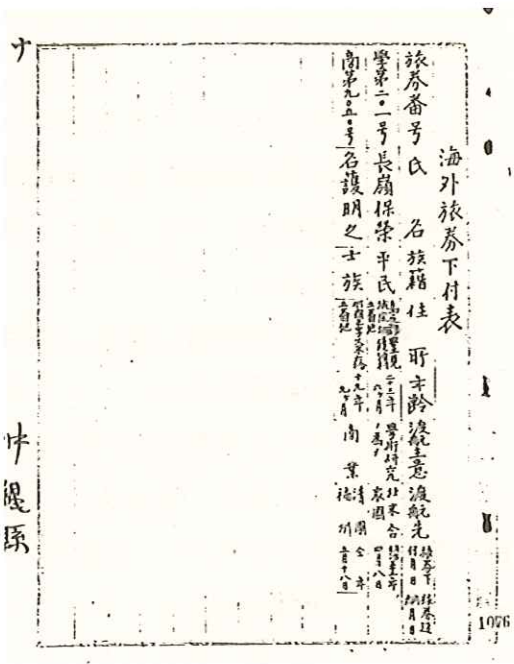
まず、村史において豊見城初の海外移民について記述した箇所をみると、

> 村よりハワイへの第１回目渡航者は嘉数の比嘉仁徳（商業学校出身）で、明治37年であった。（816頁）

とあり、これ以前のことについては触れた記事は見当たらないので、比嘉仁徳を豊見城初の海外移民と捉えているものと思われる。

しかし、「外務省 海外旅券下付表」（以下、本稿においては「下付表」という）にみえる豊見城における海外渡航者の初見は、1899年（明治32）４月８日付で「学術研究」を渡航目的として北米への旅券を下付された饒波村(1)の長嶺保榮である。

長嶺が下付表の記載どおり実際に渡航を果たしているとすれば、村史で紹介された1904年の比嘉仁徳によるハワイ渡航の５年前にはすでに豊見城から海外への渡航者が輩出していたこと



図版1　「海外旅券下付表」にみえる
長嶺保榮への旅券下付の記録

になる。ただし、現在のところ長嶺保榮という人物についての詳細は明らかではなく、今後の調査課題である。

その後、「学術研究」で1902年（明治35）３月に安仁屋幸純、翌03年（明治36）に「修学」のため安仁屋政基が相次いで北米へ渡航している。なお、安仁屋幸純と安仁屋政基に関しては別項において改めて詳述する。

２．名簿にみる豊見城初の海外移民

下付表にみえる豊見城における就労目的の渡航者の初見は、1904年（明治37）年11月に自由移民としてハワイへの旅券を下付された真嘉部村の外間喜展である。なお、外間の実際の渡航は、「豊見城村 ハワイ移民名簿」によれば翌05年（明治38）の１月である。前述のとおり、村史では嘉数の比嘉仁徳を豊見城初のハワイ移民としているが、ハワイ移民名簿では比嘉は1906年（明治39）１月渡航、下付表では1905年（明治38）12月下付とあり、外間の渡布が１年早い。

この点から、豊見城における海外移民の嚆矢は外間喜展と考えたほうがより妥当であると思われる。

ただ、村史において比嘉仁徳について述べた部分で注目されるのは、彼が「商業学校出身」とある点である。比嘉は当時としては高等教育を受け、経済的にも恵まれた家庭の出自であったことが窺え、また下付表に「戸主仁吉長男」とあることから、比較的富裕な家庭の長男という人物像が浮かび上がる。

海外への渡航には船賃や渡航支度費用、移民会社などへの周旋料をはじめとしてかなりの費用を必要とするため、従来一般に流布してきた「貧家の二、三男が生活苦から逃れるために移民をした」という観念は、近年の移民研究の成果により必ずしも実相を言い当てたものではないことが指摘されている(2)。比嘉仁徳の渡布もこれを裏付けているようで興味深く、ここから豊見城における出移民の特色の一端も窺えよう。

三　各地域の先覚者・功労者

１．北米

前項でも述べた渡米者・安仁屋政基と安仁屋幸純は、豊見城における初期の海外渡航者である。

安仁屋幸純は座安村出身で、1902年（明治35）３月22日付で北米への旅券を下付されている。安仁屋幸純は、本県北米移住の先駆者である安仁屋政修が1900年（明治33）に『琉球新報』紙上に発表した「北米通信」などに啓発されて渡米(3)、シカゴでカメラマンを目指して写真学校に学び、生涯シカゴを中心に活躍したという。なお、安仁屋幸純はシカゴに移住した初の県人である(4)。

1903年（明治36）には同じく座安村の安仁屋政基が就学目的で北米へ渡航している

が、下付表や安仁屋家の家譜(5)の記事などから推すと、政基と幸純は従兄弟同士のようである。また、現時点ではその詳細な系譜関係は明らかではないが、その名から安仁屋政修も近い縁戚関係にあると思われる。

当時の沖縄の人々の海外雄飛への意欲を喚起した安仁屋政修は、近親にはさらに強くその影響を及ぼしていたのであろう。このことは、血縁を頼る事例が多く見られた沖縄の移民・移住・出稼ぎの特質を端的に示しているようで興味深い。

なお、安仁屋政修は「北米通信」によって最新の海外事情を沖縄に紹介したことで知られているが、下付表にはその名が見えない。彼は熊本鎮西学院を卒業後に渡米しているので、おそらく沖縄以外の府県から旅券を受けて渡航したのであろう。

2．ブラジル

我が国初のブラジル移民には豊見城村人が含まれていることから、豊見城とブラジルとの関わりは比較的長い。さらには在伯邦人の指導者的人物・赤嶺新野栄を輩出したことなども影響してか、第二次大戦前の統計ではブラジルは後述のフィリピンに次いで豊見城からの移民の多い地域であり、1935年（昭和10）時点の在伯村人数は128人である(6)。

ここでは、豊見城初のブラジル移民である、いわゆる「笠戸丸移民」の人々と、赤嶺新野栄について取り上げてみたい。

（イ）笠戸丸移民

日本のブラジル移民の嚆矢は、1908年（明治41）６月18日サントスに入港した笠戸丸に乗船していた167家族781人であった。村史ではブラジルへの移民について、

> 豊見城村よりは饒波の金城盛吉父子、根差部外間亀、上田大城幸喜夫妻、真嘉部大城良宗等が先駆者であった。（817頁）

とあるのみで、その渡航年に関しては言及していないが、「笠戸丸便第一回伯剌西爾行移民名簿」などによれば、ここに掲げられた人々はいわゆる「笠戸丸移民」「笠戸丸組」などと称された第１回ブラジル移民として渡伯した人々である。

笠戸丸移民には村史にその名が紹介された人々をはじめとして、豊見城出身者24人が含まれていた。ここに掲げた表は名簿や文献資料をもとに、豊見城出身の笠戸丸移民24人についてまとめたものである。これをみるとその内訳は、字真嘉部（現・字根差部）の外間亀一家７人、字喜久嶺（現・字上田）の大城幸喜一家10人、同じく字喜久嶺（現・字上田）の大城蒲戸一家７人のうち４人(7)、南風原村字津嘉山の城間佐一郎の従兄長嶺加那、真和志村字国場の嘉数亀一の従弟大田向雪、具志章七となっている。

しかしこの移民家族は、初期のブラジル移民の特色である「構成家族」によるものであるため、必ずしも実際の血縁を持つものではない。構成家族とは、移民の契約を

（表）　第1回ブラジル移民（笠戸丸組）中の豊見城村出身者

	氏　名	身　分	本籍地	生　年	家長との続柄	備　　考
1	外間　亀	戸主仁九郎長男	字真嘉部	明治22年	家長	カンポ・グランデ郊外で農場経営。叙勲　（詳細は本文参照）
2	外間ミト	戸主仁太郎長男亀妻	字真嘉部	明治22年	妻	（詳細は本文参照）
3	赤嶺喜佐	戸主	字真嘉部	明治15年	従兄	耕地逃亡の後、ノロエステ鉄道工夫などを経て1915年よりカンポ・グランデ郊外で農園経営
4	大城良宗	戸主孝二男	字真嘉部	明治15年	妻従兄	1914年帰国。1926年再渡伯。アキダウナ郊外で農園経営　（詳細は本文参照）
5	大城宗人	戸主	字真嘉部	明治 1年	従兄	後に帰国。帰国時期、理由等は不明
6	大田　亀	戸主興久弟	字豊見城	明治17年	妻従兄	妻カマド他家族11人で、カンポ・グランデ郊外において農業に従事
7	新垣カマト	戸主加那二女	字高入端	明治23年	従妹	アルゼンチンに転住
8	大城幸喜	戸主武男三男	字喜久嶺	明治22年	家長	カンポ・グランデ入植の草分け　（詳細は本文参照）
9	大城カメ	戸主武男三男幸喜妻	字喜久嶺	明治24年	妻	大城立裕の小説『ノロエステ鉄道』のモデル。叙勲　（詳細は本文参照）
10	外間長信	戸主長太郎長男	字高入端	明治16年	従兄	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明
11	大城加那	戸主谷五郎長男	字喜久嶺	明治27年	従弟	アルゼンチンに転住後、ブラジルに再移住。マラリアで病没
12	大城蒲戸	戸主長太郎三男	字喜久嶺	明治17年	妻従兄	アルゼンチンに転住
13	新垣　亀	戸主亀吉長男	字高入端	明治24年	甥	アルゼンチンに転住か
14	宜保弘齊	戸主	字喜久嶺	明治 8年	伯父	後に帰国。帰国時期、理由等は不明
15	大城保吉	戸主	字喜久嶺	明治 6年	妻伯父	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明
16	金城盛吉	戸主盛元長男	字高入端	明治26年	妻甥	アルゼンチンに転住後、ブラジルに再移住。叙勲　（詳細は本文参照）
17	金城盛四	戸主	字高入端	明治 4年	叔父	金城盛吉の父
18	大城蒲戸	戸主端太郎弟	字喜久嶺	明治15年	家長	ノロエステ鉄道工夫を経て、農園経営。カンポ・グランデ入植の草分け
19	大城ウト	戸主端太郎弟蒲戸妻	字喜久嶺	明治18年	妻	農業の傍ら、産婆として邦人間で活躍
20	大城亀代	戸主従善二男	字喜久嶺	明治13年	従兄	アルゼンチンに転住。その後の詳細不明
21	外間蒲戸	戸主亀吉弟	字高入端	明治25年	従弟	アルゼンチンに転住
22	長嶺加那	戸主	字 良 長	明治 6年	城間佐一郎従兄	1933年以前に没
23	大田向雪	戸主亀長男	字豊見城	明治14年	嘉数亀一従弟	1915年頃、バレーロ植民地に県人15人とともに入植。同植民地への入植の経緯は不明
24	具志章七	戸主	字豊見城	明治24年	嘉数亀一従弟	1933年以前に没

参考資料
「外務省 海外旅券下付表」（外務省外交史料館蔵・琉球大学移民研究センター複写本）
「笠戸丸便第一回伯剌西爾行移民名簿」（『日本移民五十周年記念 かさと丸』所収）
『ブラジル沖縄県人移民史 －笠戸丸から90年－』（ブラジル沖縄県人会　2000年）

締結するため、家族移民の条項に合致するよう名簿上で仮に構成した家族のことで、実際には夫婦ではない者同士を夫婦としたり、また名簿上の家族が実際は他人同士ということもあったようである。ブラジルの初回契約移民の家族構成について、石川友紀は「殆どの家族が契約条件に合せた便宜上の家族、すなわち、偽家族であった」と指摘している(8)。実際は親子である金城盛四と盛吉(9)がそれぞれ大城幸喜の叔父と妻の甥となっていることからも、移民名簿に記された家族構成の信憑性のほどが窺い知れよう（表参照）。

笠戸丸移民に関しては在伯邦人、県人を中心にさまざまな出版物が刊行され、その略伝などが紹介されている。その中でも城間善吉の『在伯沖縄県人・五十年のあゆみ』（1959年）は、移民本人への直接の取材により笠戸丸移民の辿った苦難や成功の歴史をよく描き出している。ここでは、同書によって豊見城出身の笠戸丸移民についてみてみたい。

① 大城幸喜・カメ

第１回移民が辿った50年の足跡は波乱万丈と言うか、死闘の連続であった。言語風俗習慣の全く異なる国に移り、不自由を忍び、よく己に克って生き抜いて来たのである。

図版2　赤嶺幸喜・カメ（『在伯沖縄県人・五十年のあゆみ』より）

大城幸喜氏夫妻は夫19歳、妻17歳の若年で家長となり、８人の家族を引率して渡伯したのであった。配耕地はフロレスタ耕地で、ここで６ヶ月の契約労働を済ませ、次にイツーの町より７粁の地点にあるカンポスネット耕地に移った。当時日雇人夫の賃銀は男２ミル500レース、女１ミル500レースで毎日10時間働かなければならなかった。大城氏夫婦はこの耕地で日雇人夫として４ヶ月働いた。そこに当時マットグロッソの鉄道工事に行けば日給５ミルレースになるという噂が伝わって来た。丁度その時、金城盛吉氏の父親が工夫の募集に来たので、第１回移民73名が応募してマットグロッソ向け出発した。サントス港を出て船に乗り、アルゼンチンに渡り、今度はラプラタ河をさかのぼってマットグロッソ入りをしたわけである。その間26日を費して、目的地ポルト・エスペランサに到着した。これは明治42年８月の事で、このポルト・エスペランサにはペルーよりやって来たという通訳兼監督の松尾健三氏が居て、全員を５班に分け鉄道工事に携わらせた。班長には遠藤特務曹長、宮田軍曹、有馬伍長、大城幸喜氏等が任命され、工事に取りかかったわけである。

給料が高いも道理、工事場は海抜わずか何米という低地で、一旦大雨が降れば一帯が

水浸しとなって折角盛り上げた土は崩流されてしまうし、蚊群は昼夜の別なくおそいかかって来た。おまけに原始林の彼方から、人間の臭いをかいで猛獣が附近を徘徊して、全く命がけの仕事であった。

大城氏は班長として皆の先頭に立ち、1909年より1915年まで働いたが、不幸にも従弟が悪性のマレイタにかかり、日に日に衰弱して行った。大城氏は遂にたまりかね、総監督のドクトル・ケース氏に請願して、移転の許可を得た。そして従弟をつれ、アルゼンチンのロザリオ市に出て専心従弟の看病に当った。しかし、時既におそく、従弟は大城氏夫妻に手を執られつつ静かに昇天してしまった。仲尾権四郎、山城興昌、新垣ナベ諸氏が旅費を工面し、鉄道工夫として参加したのもこの当時の事であった。

大城氏は再び工事場に帰ったが、今度は工夫をやめ、鉄道の枕木や汽車が焚く薪などを請負って伐出した。鉄道沿線450メートルに亘る原始林より材木を伐出すのである。何百人の伐出し人夫を使い、48の牛に牛車を引かせて運び出す。山が遠距離になるに従い牛車の数を増し、終には10台の牛車を駆使して、材木を運び出したものであった。当時枕木１本が４ミルレースであったので、毎日相当の利益が大城氏のふところに転がり込んで来た。しかし、何事によらず調子が良いとなれば同業者が現われるもので、しばらくすると大城氏の競争者が４人も現れた。その結果、枕木の値段はまたたく間に下落して４ミルレースから２ミル500レースになってしまった。実費を割っての無理な競争に巻き込まれた大城氏はとうとう癇癪を爆発させた。大損覚悟で4000本の枕木を１本１ミルレースで売り飛ばし、癇癪のおかげで一時に100コントスの借金を作ってしまった。当時マットグロッソ州で大請負業者オーシロと言えば伯人社会でも、誰知らぬ者もない存在で、15年間、何百人というブラジル人の荒くれ労働者を顎一つで動かし、原始林を拓いて来たのであった。1923年、この男性的な請負業もやめ、ドラーロに移って、今度はピンガ（火酒）製造をはじめた。事業は順調な発展を見せていたが1931年革命が起り、世間は急に不景気となり、ピンガも売れなくなった。そこで手持のピンガ3000リットルを瓶詰にして各地の小売店に半値で売り払ってしまった。こうして事業も頓座してしまったところへ大城氏が病気となり、非常に危険な状態となった。これを聴いて、カンポ・グランデ市に住む友人源河豊正、儀保徳両氏が、自動車を以て大城氏を迎えに行き、カンポ・グランデ市の病院に入院させた。

カメ夫人の手厚い看護により、病気もなおったのでカンポ・グランデ市で農産物の仲買をはじめた。段々に家運を盛りかえして、1937年に雑貨店を開き大いに繁昌し、往年の盛大さを取り戻したのであった。

ところが好事魔多し、終戦直後の８月20日、カンポグランデ市民と学生が大動乱をひきおこした。この巻き添えを喰って、大城氏は家を焼かれ、一夜にして全財産を失ってしまったのであった。その時の打撃により、身心共にうちひしがれた大城氏は眼病にかかり、現在も視力は鈍く、ようやく明暗を弁ずる程度である。又カメ夫人もこ

の暴動の時卒倒してより、体力が弱り、一家は生きる道を失ってしまった。独り気丈な長女が、一生懸命に動きだしたが、体に無理を重ねた為、これ又病気となり、両親に先立って逝去してしまった。現在は盲目同然の大城氏と、カメ夫人は長男義則氏にたよって静かな生活を送っている。閑々と手を拱いて座っている大城氏を見て、この人が何百人もの荒くれ男を叱咤し大事業を切り廻した往年の古強者か、男の中の男、マットグロッソの大親分と言われ、社会的な信用と尊敬を一身に集めた大城氏かと思うと、涙なきを得なかった。

しかし、生来気性のしっかりとした大度量の大城氏は現在の境遇を悲しむこともなく淡々と昔の話を聞かせてくれた。（226～227頁）

② 金城盛吉

金城は15歳の時大城幸喜氏の家族に入り、洋々たる未来を夢見、雄躍してブラジルに渡航した。最初大城氏の家族と共にフロレスタ耕地に入り、６ヶ月後に、退耕イツーの町に出て６ヶ月間家庭奉公をした後ノロエステの鉄道工事に従事した。２ヶ月間働いた後、路銀もたまった。「ここで一地一儲け」とアルゼンチンに渡った。

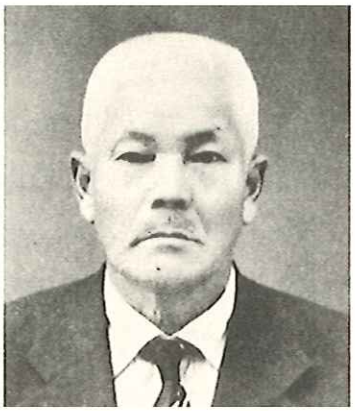
図版3　金城盛吉（『在伯沖縄県人・五十年のあゆみ』より）

工場に職を得て働きだしたが、なかなか思うようには金が残らない。それでも根気よく５年間働いてみたが、将来に希望が持てないので、再びブラジルにとって返し、ソロカバナ線イタチンガ駅のシトラ耕地でコロノとして働いた。そして1919年ジュキア線アンナ・ジーアス駅に移り、２年間米作を試みた後セードロ駅にかわった。ここに７アルケールスの土地を購入し、米作とバナナ栽培を始めた。土地も良く、作物の売価も良く、幸運にも恵まれて、始めて悠々と仕事を楽しみながら生活出来るようになった。こうしてセードロ駅に21年間在住し、1950年、子供達の将来を考えてサンパウロ市に移って来た。金城氏は1916年に現夫人ウシ子さんと結婚し二男三女を儲け、家庭的には至極めぐまれ円満な生活をおくって来た。セードロ駅在住時代に一時は雑貨店を経営して商買の経験もあるので、サンパウロ市に出てからも、種々な商取引きを手掛けて現在に及んでいる。尚氏の長男はタキシー業に従事しており、その他の子供たちも、それぞれの道に向かい、一家は末広がりに発展しつつある。（218頁）

③ 外間亀

外間氏は夫婦ともに20歳の時ブラジルに渡って来た。大野基尚通訳に連れられてフロレスタ耕地に入った。西も東も解らないし、言葉も通じない。食料品を請求するにも手真似以外に術がない。種々な食料を貰って来ても今度は料理に仕方がわからない。えい面倒なと、毎日握飯を食って働いていた。副食物は摂らないのであるから、段々栄養不良におちいり、遂に畑でぶっ倒れた事もあった。

当時の耕地には、未だ奴隷使用時代の習慣が残っていて、労働者は人間扱いされなかった。わずかな給料で追い使われ、満足に食べることも出来ないので、少しでも収入を多くしたいと思い午前２時頃から起き出して働いたこともあった。


図版4　外間亀（『在伯沖縄県人・五十年のあゆみ』より）

１ヶ年半の耕地生活を切りあげ、イツーの町に出て来た。妻を日給１ミルレースの紡績工場に通わせ、亀氏は牛乳しぼりの仕事にありついて月給20ミルレースを貰うことになった。夫婦の働きにより、節約すれば、少しづつ金も残るようになった。しかしブラジルまで来たからには、もっと金の儲る仕事をしたいものと、毎日暇をみては仕事を探して歩いた。そして運よくビール会社に、もっと楽で金の貰える仕事を見つけ、そこで働いた。

このイツーの町にドクトルジャイメと言う人が居た。この人は日本人に好意を持ち、耕地に働く日本人の待遇を改善するため、自発的に度々耕主や支配人に交渉してくれ、日本人の便宜をよく計ってくれた。又今一人若く貴公子然とした風采のブラジル人親日家が居た。事情に暗く言葉の解らない日本人をいつも、親切に世話をしていた。日本人の名は覚えにくいと言って、一人々々に別な呼び名を勝手につけ親しく呼びかけ、親しんでくれた。外間氏もこの２人の親日家に度々世話になったが、今もこのかくれた親日家に感謝していると語っていた。

外間氏はその後イツーの町を去り、サントスに出て波止場人足となった。日給５ミルレースを貰い安定した生活をしながら、６年間サントスで暮らした。その頃ノロエステの鉄道工事が始まり、工夫の賃金がすばらしく良いという話で、知人の誰彼が行った。外間氏も後れてはならじ、というのでノロエステ鉄道の工夫となり、ビリグイに移っていった。

今でこそビリグイは開けてノロエステの雄都となっているが、外間氏の移転した当時のビリグイは、さびしい田舎の村落に過ぎず、地価など１アルケールが只の300レースであった。50年の後を考える程ではなくても、少し先の事も慮り、この土地を買っておけば、十数年を出ずして大金満家になれたであろう。しかし、当時の日本人は、只賃銀の一文でも多い所を追って、西に東に転々と歩きまわっていた。今から考えてみると、何とも浅ましいものであったと悔いられる、と外間氏は言っていた。

外間氏はビリグイで工夫稼業を６ヶ月やり、思わしくないので、カンポグランデ町に移って行った。ここで測量技師の助手として６ヶ月働き、次に荷馬車を買って運搬業をはじめた。はじめは薪木などを運搬していたが、後には野菜栽培者から野菜を買い、馬車に乗せて市中を売り歩くようになった。

この仕事は順調に運び、金も蓄えたし、子供達も成長したので、市の近郊にシャー

カラを買い、野菜の栽培と販売を業として今日に及んでいる。

現在カンポグランデ市で日本人が大いに発展をみせているが、そのかげには、黙々として土にまみれて働いて来た日本人の努力があり、それが一般に認められて、今日の絶大な日本人に対する信用となったのである。

華々しく表面に出て活躍はしないが、永い間、縁の下の力持ちを果して来た人こそ、本当の拓人として尊敬しなければならない。真面目によく勉強する孫たちの側で微笑を含みながら、過ぎ来し方を淡々と語る外間氏は、そうした拓人の一人である。（225～226頁）

④　大城良宗

大城氏が外間亀氏家族の一員となって渡伯したのは26歳の時であった。配耕先はフロレスタ耕地で、真面目に働いたので、耕主や大野通訳にも信用され、第１回移民中の模範青年といわれ、大いにほめられた。

耕地就働中、移民は皆食うのがやっとで、郷里に送金出来た者は一人もいなかった。しかし大城氏は100ミルレース（当時は大金であった）を郷里に送り、非常に父母をよろこばせた。契約終了後、耕地の支配人が自分の私有耕地で働かないかと勧めたので、行くことにした。ところが意外に賃銀が安く、先の見込みも立たないので、すぐに飛出し、ノロエステ線の鉄道工夫となって行った。サントス港から船に乗りアルゼンチンに渡りラプラタ河をのぼってマットグロッソ州に入った。工事場は原始林の中で、非常に働き難い所であった。おまけに風土病があり、同僚はバタバタ死んでいった。この工事に応募した第１回移民は50余名であったが、その中20数名が、此処で命を失ったのであった。葬式の棺をかつぎながら、「今度は誰の番だろう」と冗談めかして言いながら、誰も内心不安でならなかった時もあった。

大城氏が働きはじめてより５年間、工事もカンポ・グランデのジャラグア駅まで完了したので、工夫をやめた。1914年に帰国して郷里で百姓となったが、広いブラジルで生活したことのある氏にとっては、沖縄の微々たる百姓仕事は物足りなくなって来た。

そこで1926年、再渡航して今度こそ一旗あげて来ようと、妻子を残して単身渡伯した。再び鉄道工夫となって働いたが、３年後にアキダウアナ町に移って野菜作りをはじめた。農業をするには独身生活を不自由で能率もあがらない。ブラジルの土地にも愛着が湧いたので1932年に妻子を呼び寄せた。今度は土地も購入して本格的な野菜作りをはじめた。

現在アキダウアナ町郊外に立派な菜園を経営し、理想的な住宅を建てて、楽しい余生を送りつつある。

今は長男清幸氏に一切をまかせ、８人の孫達の成長を楽しんでいる楽隠居の身分である。大城氏が今日の幸運を克ち得たのも、余り転々と移動せず、一ヶ所に根気よく辛抱したことによるもので、今世以て範とすべきであろう。（227～228頁）

（ロ）在伯邦人の指導者・赤嶺新野栄

赤嶺新野栄は、ブラジルにおける県人の間で功労者として知られ、ジュキア線沿線を代表する日本人とも言われた。

赤嶺は、渡伯以来数々の苦難が続いた初期の日本人移民の中にあって後進の指導や諸問題の解決に努め、後に汎ジュキア連合日本人会初代会長や日本病院建設委員会の地方委員会副委員長などの要職に推された。また、私費を投じて学校用地を購入して日伯両語による学校を創設するなど、在伯邦人の子弟教育にも尽力した。村史は、この赤嶺新野栄について次のように記している。

図版5　赤嶺新野栄（『在伯沖縄県人・五十年のあゆみ』より）

> また、赤嶺新野栄も明治45年に渡伯したが再渡航時に甘蔗を持参して移植、ジュキア線一帯に拡まっているという。（817頁）

字真嘉部（現・字真玉橋）出身の赤嶺は、1912年（明治45）に妻と息子２人を伴って東洋移民会社の神奈川丸でブラジルへ渡り、当初はバウルー管内アオノポリスの耕地に配耕された。その後ジュキア線の鉄道工夫、サントスの波止場人夫を経て、1914年にジュキア線セードロ河畔に小作農として入植した。後に友人の山城柳吉とともにセードロ駅付近に耕地を購入したが、これはジュキア線沿線で日本人移民によって購入された最初の土地であったといわれる。

セードロでは当初米作を試みて成功を収め、これに勢いを得て次々と耕地を拡張し、作物についても研究を重ねた。例えば、バナナの将来性を見越してその栽培を手掛けたり、砂糖やピンガ（甘蔗の搾汁から作るブラジル独特の蒸留酒）の原料である甘蔗に着目し、1927年（昭和２）に夫婦で故郷を訪ねた際に沖縄から大茎種の甘蔗の苗を持ち帰って栽培し、その普及に尽力した。その後、大茎種はジュキア線一帯に広まることとなった。

大茎種の甘蔗は大正末から昭和初期にかけて台湾から沖縄へ導入され、さかんに普及奨励が行われた。その結果産糖高は従来の品種に比べ飛躍的に向上し、沖縄の糖業発展に大きく寄与した。赤嶺が帰郷した1927年は折しもその大茎種導入の時期であり、久々に帰った沖縄の地でこの優良品種の甘蔗を目のあたりにし、ブラジルでの普及を思い立ったのであろうことは想像に難くない。これも、赤嶺の先見の明と進取の気象をよく示した逸話といえよう。

なお、下付表には赤嶺新野栄と妻ウシが1905年（明治38）に自由移民としてハワイへの旅券を下付された記録があるが、彼の略伝のいずれにもそのことは記されていない。何らかの事情でこのハワイ行きを断念して７年後の1912年に渡伯したのか、あるいは渡布はしたものの早々に引揚げ、その後ブラジルに新天地を求めたのかは現時点では定かではない。この点も今後の調査課題のひとつである。

3．フィリピン

豊見城からの出移民先として、最も多くの人々を送り出したのはフィリピンであった。1935年（昭和10）の在比村人数は275人で(10)、これは次に移民数の多いブラジルの２倍以上であり、突出した人数であるといえる。

村史では、豊見城のフィリピン移民について次のように記述している。

> フィリッピン群島マニラへ渡航したのが明治37（1904年）で金武村大城孝蔵氏以下36人であった。次いで246人が渡航し、有名なベンゲット道路完成後ダバオに渡り、マニラ麻栽培に従事し、その後の移民はほとんど麻栽培で、麻栽培者の７割までが沖縄人となった。農業移民以外に漁業者も多く渡航したのであった。ハワイ、ブラジル等が制限されてからは気候風土がよく似た沖縄からの移民が増えたのである。
>
> 豊見城村からは渡嘉敷の赤嶺亀次郎氏が明治39年に渡比、続いてその弟達も渡航して草分けとなり明治40年に同字金城保四郎氏が大正４、５、６年には多数が渡航したのであった。昭和２年10月にはダバオ在留村人数は305人であった。
>
> （817頁）

以下本項では、豊見城初の渡比者である赤嶺亀次郎とその兄弟、そして在比邦人の指導者としてその名を知られた上原仁太郎について検証していきたい。

（イ）フィリピン移民の先覚者・赤嶺兄弟

村史において豊見城初のフィリピンへの渡航者として紹介されている字喜久嶺（現・字渡嘉敷）の赤嶺亀次郎は、ミンダナオ島ダバオにおいて兄弟で大規模な麻栽培の農園を経営したことで知られる。

幸いにも調査の過程で、赤嶺兄弟の二男加那の子息夫保氏が本市内に在住されていることがわかり、同氏よりフィリピンにおける赤嶺兄弟についての聞取りを行うことができた。なお、夫保氏はミンダナオ島に生まれ、ダバオで高等科を卒え１６歳で出征、台湾で終戦を迎えて1947年（昭和22）に日本に帰還している。

また同氏より、1942～43年頃のフィリピンにおける赤嶺兄弟拓殖株式会社及び赤嶺加那名義の納税関係書類や領収書、日本占領下のフィリピンで使用された軍票などの寄贈を受けた。これらの資料は、当時のフィリピン移民の生活の一端を知る上で大変貴重な資料である。

以下、本項では名簿や文献資料と夫保氏からの聞取りをもとに、赤嶺兄弟についての概略を記すこととしたい。

赤嶺兄弟の長男亀次郎は、1906年（明治39）に太田興業の第１回移民募集に応じてフィリピンへ渡った(11)。当時は両親が健在だったこともあり、妻子を残して単身での渡比であった。その後、1912年（明治45）に二男加那が渡比しているが、これは兄亀

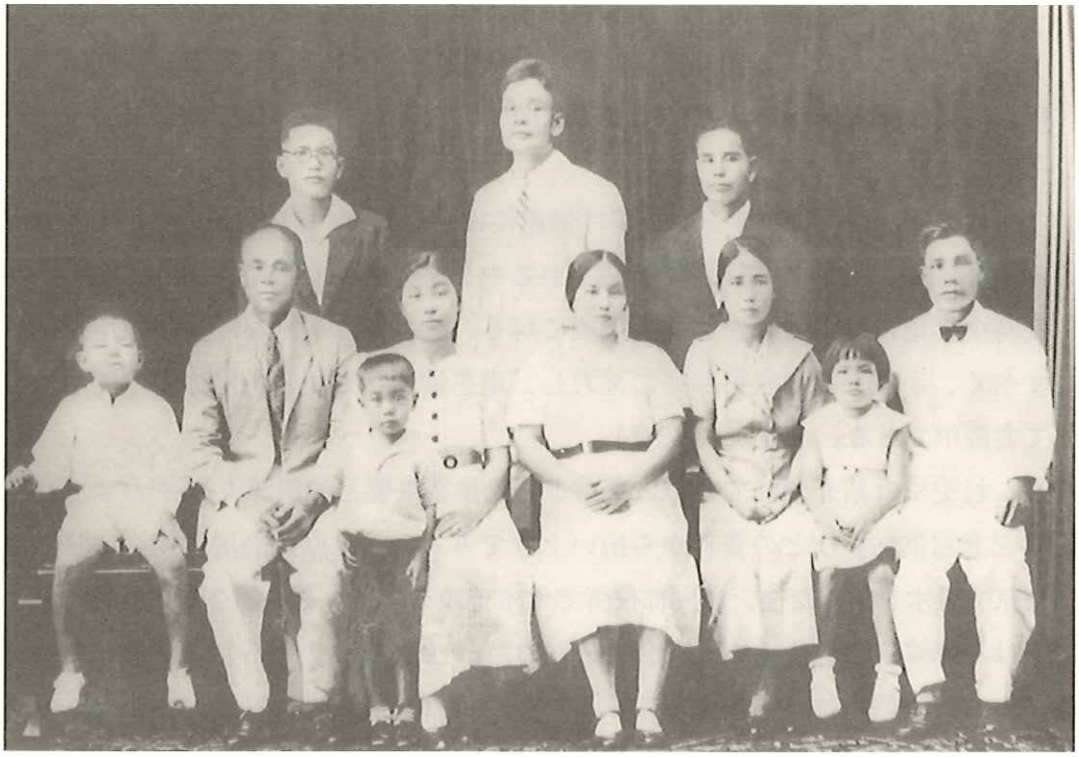
次郎の呼寄であったようである。

1916年（大正５）にはブナワン赤嶺兄弟拓殖株式会社を設立し、弟の三男徳三、四男亀二、五男栄俊を相次いで呼寄せるとともに、同郷で商業学校出身の大嶺快玄を加えて亀次郎を社長としてブナワン耕地でマニラ麻栽培農園を経営した。赤嶺兄弟の農園では常時５～６名、最盛期には10人以上の人夫を雇い入れていたという。耕地面積は220町歩に及び(12)、耕地全体を見廻るには馬に乗っても一日を要した。その麻山の跡は現在では椰子林となっているものの、地形などは当時の面影をとどめているという。

当初は兄弟全員が農園経営に携わっていたが、後に三男徳三はダバオ市内でタクシードライバーとなり、四男亀二はテブンコ木材株式会社の発電所の責任者に転じている。

なお、「自由移民名簿」には、1918年（大正７）８月７日付で長男亀次郎と四男亀二に旅券が下付された記録がある。なお、旅行目的の欄に亀次郎は「再渡航・農業」、亀二は「兄ト同行・農業」とあり、亀二はこのときに長男亀次郎と四男亀二に対し一時帰郷した兄に同行し、はじめて渡比したと考えられる。

また、亀次郎が没した1929年（昭和４）には次男加那が帰郷している。下付表よれば加那はこのとき、亀次郎の娘咲子を伴いフィリピンへ再渡航している。



図版6　1937年（昭和12）頃の赤嶺兄弟とその家族（赤嶺夫保氏提供）

前列左より加那長男夫保、次男加那、亀二長男明、亀二妻政子、加那妻ウシ、
徳三妻千代、加那長女和子、四男亀二。後列左2人目より三男徳三、五男栄俊

（ロ）在比邦人の代表的人物・上原仁太郎

フィリピンで活躍した沖縄県人のうち、最もその名を知られた人物のひとりに上原仁太郎がいる。上原は、第二次大戦前に出されたフィリピン移民関係の刊行物ではほぼ例外なく在比邦人の中心人物として大きく取り上げられており、当時の彼の影響力の大きさを窺い知ることができる。

図版7　上原仁太郎（赤嶺夫保氏提供）

上原仁太郎は村史の中で、豊見城出身の名士の略伝を記した「第７章　人物」の項でも取り上げられ、次のように紹介されている。

明治23年１月20日本村字名嘉地で出生、明治44年３月東京攻玉社土木専門学校卒業後同年４月島尻郡役所土木課勤務、大正６年７月渡比、大正13年３月までミンダナオ島ダバオブナワン耕地で麻耕地経営、同年４月よりダバオ市において（日本人小学校設立せられたので）ホテル経営、ダバオ県人会会長（30年間）、ダバオ日本人会副会長を歴任した。大東亜戦争中はダバオ日本人会長の要職にあって３万余の在留邦人を指導して必勝を期し軍に協力した。

氏は資性恬淡、態度真摯、社会奉仕の念篤く、仁侠の精神にとみ、溌剌とした才気と卓越した識見でもって在留邦人の向上発展につくし、邦人、郷友に対して個人的にも犠牲的援助を与えて救済扶助した美談が多く、県出身移民中一偉材だと言われている。

終戦に伴ない、ダバオを引き揚げ帰還後は昭和27年（西暦1952年）軍人軍属遺家族援護法、同28年に恩給法が実施されるや「比島関係遺族等相談所」を開設して、戦時中外地において戦歿した遺家族に対し、該当者はもれなく法の適用を受けさすべく、手続上の相談指導等に努力し、現在横浜と郷里と各関係官庁間を往復して奮闘中である。（326～327頁）

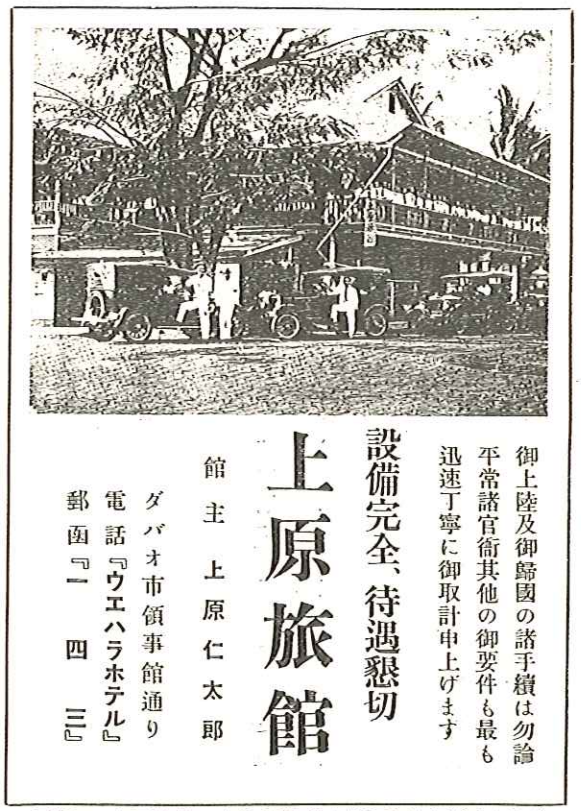
なお、村史では紹介されていない事項を『比律賓概要と沖縄縣人』『ダバオ開拓三十五周年記念寫眞帖』などの資料から拾い上げてみると、上原は島尻郡組合の貸費生として東京で土木を学んだ後、島尻郡役所で土木行政を担当、その間２年の兵役に服し、除隊後は在郷軍人会の豊見城村分会長を勤めた。1916年（大正５）、沖縄実業銀行に転職するも、当時の沖縄の実情をみるうちに「海外発展以外に県民の更生なし」と考えるに至り、1918年（大正７）６月渡比した。

渡比当初はブナワン拓殖会社の耕地で麻山を自営したが、1924年（大正13）４月にダバオ市に日本人学校が設立されると、四男二女の父である上原は子弟教育の重要性を考えて通学の便のよいダバオ市内へ出て「上原旅館」を開業した。上原は自らの子に高等教育を受けさせたほか、経営する旅館内に耕地から出てきた十数人の通学児童

を下宿させ、わが子同様に家庭教育を施したという。

また、上原はスペイン語に堪能でフィリピンの官吏や弁護士等にも知人が多く、世話好きな性格でもあったことから、長く日本人会や沖縄県人会の役員を勤めた。1938年（昭和13）３月、大城孝藏の銅像建立のために帰県した折、日本各地及び台湾を視察、同年６月に東京・羽田飛行場において挙行された海軍献納機ダバオ号の命名式にはダバオ日本人会を代表して参列している。

当時、上原仁太郎の名声は内外に広く聞こえており、豊見城からフィリピンへの移住者を多く輩出した背景には、彼の成功談も少なからず影響したともの と想像される。



図版8　上原旅館の広告（『比律賓概要と沖縄縣人』より）

四　むすび

現在、豊見城における海外移民や出稼ぎについてその全体像を知ろうとするとき、『豊見城村史』は唯一といってよい資料である。ただ、紙幅の都合や編纂人一人が全体を執筆するという当時の村史の編集形態などの関係上、その内容は概略を述べたのみという印象を免れない。

本稿では、村史の移民・出稼ぎについて記述された部分から、特に先駆者や代表的人物について移民名簿や文献資料などによって再検証を試みた。冒頭にも述べたように、現在豊見城市では『豊見城市史 第８巻 移民編』の編集作業を進行中であり、本稿はその中で収集した情報と村史の記事とを照合する過程で執筆したもので、いわば村史の補遺ともいうような内容となった。

ただ、本稿は筆者の浅学ゆえに遺漏や誤謬も多いことと思われる。この点は後日の訂正及び追加を約して諸賢のご寛恕を頂き、まずは現時点での豊見城における移民調査の進捗状況の報告として『市史だより』に掲載した次第である。

なお、多くの移民関係資料の提供や複写をご許可頂いた琉球大学移民研究センター、同副センター長・町田宗博教授、調査にご協力頂いた赤嶺夫保氏をはじめ、有益なご教示ならびにご厚意を賜った各位に対し、深甚なる感謝の意を表して本稿を結びたい。

註

（1）現在の字饒波。1908年（明治41）の郡区制施行以前であるため、下付表の長嶺の本籍は「豊見城間切饒波村」と記載されている。

（2）石川友紀『日本移民の地理学的研究』(1997年 榕樹書林) 541頁

（3）照屋聡子「アメリカ本国移民」(沖縄大百科事典刊行委員会編『沖縄大百科事典』1983年 沖縄タイムス社 上110頁)

（4）「世界のウチナーンチュ シカゴ」(琉球新報インターネット）による。

（5）「東姓家譜（津波古家)」(那覇市企画部市史編集室編『那覇市史資料篇 第1巻 家譜資料（三)』1982年 所収）による。

（6）村史「海外渡航者数調」表（819頁）による。

（7）なお、大城蒲戸一家のうち豊見城村出身者ではない3人の本籍は、儀間眞享と宮城仲盛が大里村、新垣平太が南風原村となっている。

（8）註2に同じ。546頁

（9）ブラジル沖縄県人会移民史刊行委員会日本語編集委員会編『ブラジル沖縄県人移民史』2000年 ブラジル沖縄県人会) 76頁

(10) 註5に同じ。

(11) 村山明徳『比律賓概要と沖縄縣人』（1929年 文明社) 34頁

(12) 『ダバオ開拓三十五周年記念寫眞帖』1935年

本稿において利用した名簿資料

・「外務省 海外旅券下付表」（外務省外交史料館所蔵資料より石川友紀琉球大学名誉教授が沖縄県出身者分を抽出したもの・琉球大学移民研究センター所蔵)

・「笠戸丸便第一回伯剌西爾行移民名簿」(内山勝男編『日本移民五十周年記念 かさと丸』1958年 日本移民五十周年祭委員会 所収)

・「自由移民名簿 自1908（明治41)年 至1920(大正9)年」(沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編『沖縄県史 資料編8』1999年 沖縄県教育委員会)

・「豊見城村 ハワイ移民名簿（1905～1908年)」(沖縄県立図書館資料編集室編『沖縄県史料』移民名簿Ⅰ(1992) 移民名簿Ⅱ(1994) より作成)

豊見城市字与根の人生儀礼
－産育と婚姻－

儀 間 淳 一（文化課市史係嘱託）

はじめに

人は生まれてから死ぬまでの間にいろいろな節目を迎える。なかでも誕生や成人、結婚、厄年、死などといった重要な節目には、昔からさまざまな儀礼が行われてきたが、これを民俗学では人生儀礼と呼んでいる。

例えば、沖縄では子どもが生まれると、新生児にワラビナー（童名）を付け、庭先では弓矢で箕を射倒す名付けの儀礼があったり、年頃の娘や既婚女性が手に入墨を施す習俗などがあった。このような儀礼や習俗は、成長の確認や社会的立場の変化の表明などのために行われているという(1)。

しかし、これらの多くは、戦後、社会や生活様式の変化により、現在では消滅したり、簡略化している。これは他の民俗事象にもいえることであるが、人生儀礼の場合、前記の要因に加え、個々の家庭の事情によるところが大きいため、他と比べその度合いが著しい。また、こうした儀礼は地域的差異が少ないといわれ、各字ごとに調査・記録されることはあまりなかった(2)。

このような消えつつある民俗を収録するため、豊見城市文化課では、2000（平成12）年に『豊見城市史第７巻民俗編』専門部会を発足し、各字の民俗調査を開始した。筆者は字与根を担当することになり、人生儀礼や村落祭祀などを調査している。本稿は、その調査成果の一部である。

(1)『民俗学がわかる事典』(1999) 122頁

(2)本市の人生儀礼について、『豊見城村史』(1964) には一般的な儀礼のみ掲載されている。
字単位では、『保栄茂ぬ字誌』(2001)・『上田誌』(2001) で取り上げられている。

一、村落概況

豊見城市字与根は同市の西岸部に位置し、西は東シナ海に面し、北は田頭、東は伊良波・座安、東南は翁長に接している。方言ではユニという。当字は我那覇・名嘉地・宜保・伊良波など近隣からの移住者によって形成された屋取集落である。そのため、人々が寄り集まってできたムラという意味の「寄り部落（ユイブラク）」または「寄り国（ユイグニ）」が与根になっ

たといわれている。このほか、砂地を意味するヨナ・ヨネという語が地名になったともいわれている(3)。

この一帯は標高１～２ｍの低湿地帯が広がり、かつては稲作や藺草の栽培が盛んであったが、1960年代以降の土地改良事業により、現在ではおもに蔬菜を栽培している。

沿岸部には与根漁港があり漁業従事者が多い。2004（平成16）年度の市内漁協加入者７７名のうち50名が与根の住民である(4)。

そのほか、与根の海岸は干潟が発達しており、明治期に那覇市泊の住民が移住し、この干潟を利用して製塩業を営んでいた。同地の塩は「ユニマース」の名で知られ、現在も製塩業者２社が営業している。

1997（平成９）年に着工した与根翁長地先（現在の豊崎）の埋め立て工事（豊見城村地先開発事業）は、約500億円を投じて160haを埋め立て、住宅地や事業所・商業地として利用する計画である。人口1,735、世帯数553（2005年１月末現在）。

（３）宮城真治『沖縄地名考』64・65頁

（４）豊見城市役所経済部農林水産課調べ

二、産　育

子授け祈願　結婚しても子どもが授からない夫婦は、結婚式をやり直した。それでも子どもが授からない場合は、親戚の子をあずかって育てるミシクーガ（見せ卵）という風習があった。これは卵を産まなくなった鶏の巣に他の鶏の卵を置くと、再び卵を産むようになるという習性を真似たものである。

その他、九月ムヌメーという行事で瀬長島に渡った際、島の北西にあるイシイリーという岩に妊娠を祈願した。この岩は、高さ数メートルあり、上部に二つの穴があった。この穴に子どもが授かるように念じて石を投げ込み、上の穴に入ったら男の子、下の穴に入ったら女の子が生まれるといわれていた。

妊　娠　妊娠している女性をカサギチューといった。妊娠すると鶏を飼い、出産した時に鳥汁にして食べた。鶏を調理している家庭があると、「アマクヮナシーサー（あそこは子どもが生まれるな）」といったという。

妊娠して７ヵ月目に入ると戌の日に腹帯を締めた。産婆が日取りを決めて腹帯を拝んでから帯を締めた。当時は貧しかったので妊娠しても臨月まで畑仕事をしていた。

出　産　産婆がいない頃は経験豊かな老女が出産に立ち会った。昭和戦前期の豊見城村には翁長・渡嘉敷・渡橋名・伊良波に産婆がいた。

妊婦は、クチャと呼ばれる家の裏座で子どもを生んだ。その時、クチャにヤナムヌ（魔物）が入ってこないように入口にヒジャイナー（左縄、しめ縄のこと）を張った。また、シンメーナービ（鉄製の大鍋）を部屋に置き炉の代用にして、薪を燃やして妊婦の体を温めた。この鍋をジールガマ（地炉のことか？）といった。薪にはアコウやガジマルを用いていたが、煙が部屋にこもるので、後から木炭を使うようになった。季節に関係なく薪を燃やしたので、夏場の出産は大変だったという。

通常は横になって出産したが、難産だと天井から紐を吊るし、これにすがり座位で生んだ。それでも生まれない場合は、男性が出産を手伝うこともあった。

へその緒は、糸で結んで切った。へその緒を切ることを「繋ぐ」といった。

イーヤー（胎盤）は、家の裏、雨垂れの落ちる所に家族が埋めた。この時、近所の子どもたちを集めて大声で笑わせた。そうすると良く笑う子に育つという。胎盤を埋めたその上に重湯を円を描くようにして三回かけ、母乳がよく出るように願った。その後、犬や猫が掘り起さないように大きなマーイシ（黒色の硬い石）を置いた。

ユートゥジ　母親は出産後の約一週間をクチャで過ごした。これを「ユートゥジ」といった。親戚や近所の人が集まって夜通し騒ぐことはなかったという。母親は、ジールガマの側に置いた鞍に座らされ、横になることもできず、眠ることもできなかったという。その間、家族や友人が食事などの世話をした。食事はソーメンンブサーやジューシーであった。

クチャにいる間、ジールガマに絶えず薪をくべ体を温めた。体を温めずに青ざめた顔でいると叱られたという。

ジールシジチ　ユートゥジが終わるとジールシジチといって、ジールガマを片付け、クチャの入口に張ったヒジャイナーを取り外し、顔や手足の汚れを落として裏座から出た。約一週間も火の側にいたので、顔も体も煤だらけで、目玉以外はすべて真っ黒だったという。産後は体を冷やすといけないので、水を使うことができなかったため、体の汚れを落とすのも濡れ手ぬぐいで拭き取るだけであった。その後、ご馳走を作って満潮の時刻に合わせて皆で祝った。

命名（名付け）　子どもが生まれてから約一週間後、母親がクチャから出るジールシジチの日にナージキー（名付け）が行われた。この日につけられる名はワラビナー（童名）である。生まれた子が長男であれば父親、長女であれば母親のワラビナーをつけることになっていた。

ワラビナーが決まると火の神に報告した。カカン（下裳、女性が腰から下に着ける着物）をかぶった老女が桑の木で作った弓矢を持って庭に出て、家の中心辺りに立て

かけたミージョーキー（箕）を庭先から矢を放って射倒した。その後、赤ちゃんの鼻の上にセーグヮー（いなご）を置いて「ムヌマキンサンケヨー、ムシウトゥルークサンケヨー（虫を怖がるなよ）」または「虫ウトゥルーシミランケーヨー（前同）」などといって鼻先から飛ばせた。

ワラビナーは家庭や友達の間で呼び合った。戸籍上の名前は役所に届け出る時に決めた。

ンバギー　子どもが生まれて三日から七日後、碗に盛った飯の上に小さな握り飯をのせたンバギー（出産祝いに出す飯）を火の神や仏壇に供え、子どもが生まれたことを報告した。碗に盛った飯をウヤ（親）ンバギーといい、その上の小さな握り飯をクヮ（子）ンバギーといった。男の子が生まれた場合、これにあやかるため、男の子がいない家庭がンバギーをもらうこともあった。

マンサン　生まれて一週間後に行われる祝いをマンサンといった。この日は、三切れの豆腐の上に素麺をかけたものを本家に持っていって供えたり、お祝いに来た親戚に出した。この料理には、素麺のように長生きするようにという願いが込められていた。この日にジールシジチやナージキーも行われた。

ヤシネーウヤ　生まれた子が病弱だと、親との相性が悪いと考えられ、相性の合う健康な人にヤシネーウヤ（養い親、仮親のこと）を頼んだ。ヤシネーウヤを頼むのは親戚とは限らなかった。預ける側の親は子どもと一緒にご馳走を持ってヤシネーウヤの家に行った。ヤシネーウヤはご飯と素麺の吸い物を準備して子どもを迎えた。素麺は「長生きするように」という願いが込められた。そして、火の神に「ここの子どもになります」といって拝んだ。

子どもは七月（盆）、正月にはヤシネーウヤの家に挨拶に行った。また、ヤシネーウヤが亡くなると、その子が葬式を出すこともあったという。

ハチアッチー（初歩き）　生後一ヶ月たつと、子どもを本家に連れて行った。外出する時は火の神に「ヤナムノーンダンケヨー、アンマーンディヨ」(悪いものは見ないで、お母さんだけ見なさい）といって拝み、子どもの額に鍋の煤を三回つけた。また、懐にはゲーン（すすきの葉を束ねて、その先を結んだもの）を入れて出掛けた。本家からの帰りも同様であった。

ウブジン（産着）　子どもが初めて着る着物を「ンブジン」といって、おばさんたちが子どもに贈った。

タンカーユーエー　満一歳の誕生祝いをタンカーユーエーといった。この日は赤飯を炊き、吸い物やチャワキ（茶請け）などを準備して親戚を呼び祝った。また、子どもの前に赤飯・銭・筆・算盤・鉛筆などを置いて選ばせ、その子の将来を占った。家族や親戚など大勢の人が見ているので、驚いて泣き出す子もいたという。

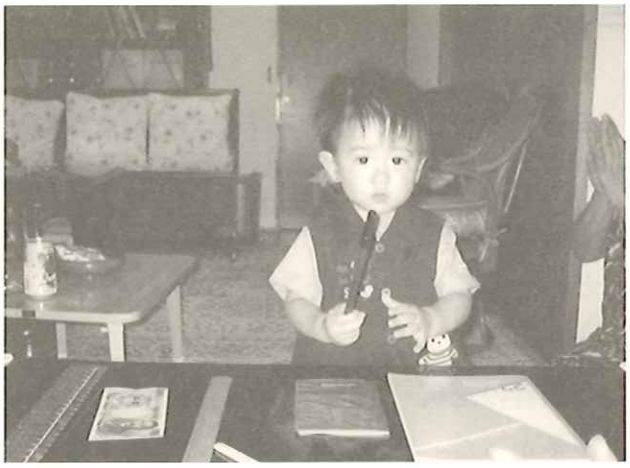


写真１　現在のタンカーユーエー（安谷屋元氏提供）

ジュウサンユーエー（十三祝）　生まれた年と同じ干支の年、数えで13・25・37・49・61・73・85・97歳をンマリドゥシ（生まれ年）といい、厄年と考えられていた。そのため、正月の初めの干支の日には火の神や先祖に無病息災を祈願したり、祝宴を開いて厄を払った。これをトゥシビーといった。

13歳の祝いをジュウサンユーエー（十三祝）というが、とりわけ娘の十三祝は盛大であった。ほとんどの女性は、次の25歳までには嫁いでいたため、親元で祝う最初で最後のトゥシビーということで着物を買ってあげたり、ご馳走を作って親戚を呼んで祝った。

ハジチ（針突）　かつて沖縄の女性が手に施した入墨をハジチという。1899（明治32）年に「入墨禁止令」が出されたが、それ以降も沖縄県内各地でひそかにハジチを施す者がいた。

明治38年生まれの女性がハジチのことを「これヤミダクトゥ…（これはヤミだから…）」といっていることから、与根でも禁止令が出た以降も施した者がいたことがわかる。

ハジチは人目を避け、メーヌヤ（前の屋、離れ屋）で施したという。針を束ねたものに墨を付けて突いた。その時、痛みをこらえるために煎った大豆を食べながら施術したという。文様には、丸形や太鼓のような形があった。

写真２　ハジチのある女性（『とみぐすく写真帳』より）

三、婚　姻

モーアシビ　仕事を終えた若い男女が野原（モー）に集まって、歌ったり踊って遊ぶことをモーアシビといい、男女が知り合うきっかけとなった。与根の場合、場所は特に決まってはいないが、珠数森にあるアジバカという拝所やその近くのンマクルビという広場がよく利用された。

配偶者の選択　ほとんどが親の言いつけで縁組が決められた。相手は同じ村落の者が多かった。他の村落の者との結婚すると「アカヌガンディ、タシマンケーウトゥムチュサ」(役に立たないから他の字に嫁いで行くよ）などといわれたが、馬手間などといった制裁金はなかった。

サキムイ（結納）　結婚する相手が決まると、男性の親が女性の実家へ相談に行った。縁談が成立すると、サンジンソウ（易者）の所に行って二人の相性を占ったり、サキムイ（結納）の日取りを決めた。どんなに二人の仲が良くても、二人の相性が悪いと結婚できなかったという。戦前、豊見城村内には字豊見城にサンジンソウがいた。

サキムイの当日は、男性側からナカフド（仲人）がサーターアンダギー・カタハランブー・芋の天ぷらなどの料理と酒一升を持参して女性の家に出向いた。仲人は、親戚や知人の中から、健康で子どもに恵まれた夫婦三組が選ばれた。女性の家で仲人は「ワッターンケークィテクミソーレー（私たちに嫁に下さい)」といった。

結納金のことをインジョージンといった。明治38年・大正６年生まれの女性が嫁いだ時は結納金はなかったという。しかし、大正13年生まれの女性の場合は、50円の結納金があったというから、当初、結納金を納める習慣はなかったと思われる。

サキムイが終わると、ニービチ（結婚式）はいつやってもよかった。

ニービチ（結婚式）　ニービチの当日は花婿側から行列をなして花嫁を迎えに行った。行列は提灯を持った男の子二人を先頭に繁昌している家の夫婦、花婿とその親、荷物持ちなどが続いた。この時、提灯は必ず右手で持たなければならなかった。

花婿方から米一俵、油一斗、小麦粉一箱を持っていくが、これを担ぐのは巳年生まれの男性であった。これはミーナシュン（実のあるものにする＝物事がうまくいくように）という言葉にあやかるためである。

行列が花嫁の家に到着すると、先頭の子どもが門前で「ミーユミヌアヤーメーサイ、ウンチケーサビラ」(新嫁お連れしにきました）と三回叫んで家に入った。一、二回のかけ声でやってくる訪問者はこの世の者ではないので、これに返事をしてはならないという慣わしから三回叫んだ。

花嫁の家では、婿側が持参した三品を仏壇に供えた。花婿は顔に鍋の煤を付けられたり、蛙の入った吸物椀や生芋で作った鶴亀を出されるなどの婿いじめを受けた。

その後、花嫁の親は「嫁ぎ先の両親のいうことをよく聞いて孝行しなさい」と娘に声をかけ、実家を出発した。

花嫁を連れて帰る途中、ふざけて花嫁を連れさらおうとする者や提灯を蹴り破る者がいたので「ユーンダンネー提灯割ラリンド（よく見て行かないと提灯を蹴り破られるぞ）」といいながら帰った。

花婿の家に到着すると、花嫁はヒンプンの右側（家に向かって）から屋敷に入った。通常、ヒンプンの右側から出入りするのは男性や客人で、女性は左側からと決まっていたが、嫁入りの時だけ右側から入ることが許された。また、花嫁は家の敷居を踏んではいけないといわれたという。

家には仏間から入り、そのまま仏壇の前で盃を交わした。盃を交わさないと宴を始めることができなかったため、到着早々盃を交わした。男性の仲人は花婿の盃に、女性は花嫁の盃に三度、酒を注いだ。

火の神はサキムイの時にご馳走を供えて拝んでいるので、ニービチの時には拝まなかったという。

与根では、花嫁衣裳は特になかった。畑仕事が忙しくて自分で仕立てる時間もなく、また、購入するほど経済的余裕もなかったという。

スバユミ（側嫁）　嫁入りの時、花嫁の女友達が３名、あるいは５名付き添ってきた。これをスバユミ（側嫁）といった。スバユミ達は、ニービチの日は花婿の家に泊まり、翌日に後片付けを手伝った。

ニービチの後片付けは、「洗い流さないように」という意味から、洗いものは翌朝にした。また、その日は「音もたててはいけない」ともいわれていたという。これはトゥシヌユルー（大晦日）も同様であった。翌日の午後、新婚夫婦は、片付けを終えたスバユミ達と一緒に映画や芝居見物に出掛けた。

着物の披露　嫁入り道具などはなく、持参したのは着物だけであった。ケー（衣装箱）に入れたり三幅風呂敷に包んで持って行った。ニービチから三日目に花嫁が持ってきた着物を花婿のおばや姉妹たちに披露した。ほとんどは着物や下着など数枚ずつであったが、それ以上になると、「アマヌイナグングヮヤ、ウェーキンチュクヮナヤー、何枚ムッチャン」（あそこの娘は金持ちの子だから何枚も持ってきた）と評判になったという。

むすび

以上、豊見城市字与根の人生儀礼について報告してきた。これまで豊見城市内の人生儀礼は地域差がないとされ、各字ごとの調査・記録が少ないことは先述した。しかし、実際に市内各字の儀礼を比較した論考はない。そのため、今後は各字の事例を比較検討し、地域的特徴を明らかにしていきたい。

最後に、今回の調査では次の方々にご教示頂いた。また、与根字史編集委員会大城成敏委員長をはじめ委員の皆様には、写真の提供など大変お世話になった。記してお礼申し上げる。

赤嶺秀さん（大正６年）　　大城ヨリ子さん（大正13年）
大城英男氏（大正８年）　　高安カマドさん（明治39年）
大城セツさん（大正11年）　　名嘉元美佐子さん（昭和26年）

※50音順（　）内は生年

参考文献

新谷尚紀編　『民俗学がわかる事典』　日本実業出版社　1999年
名嘉真宜勝　『沖縄の人生儀礼と墓』　沖縄文化社　1999年
平敷令治　『沖縄の祭祀と信仰』　第一書房　1990年
豊見城村史編纂委員会編　『豊見城村史』　豊見城村役所　1964年

編　集　後　記

◆今年度から、豊見城における移民・出稼ぎ等に関する内容を収録する『豊見城市史第８巻　移民編』の編集作業をスタートしました。稲福政斉が４月１日から新たに文化課に加わり担当しています。専門部会は部会長に町田宗博氏、副会長に長田亮一氏が選任され、崎原恒新氏、吉浜忍氏、古賀徳子氏が部会員として委嘱されております。

◆2002年（平成14）に県内で11番目の市、「豊見城市」がスタートし、「豊見城村史」も「豊見城市史」へと名称が変わり、３年が経ちました。

今回の「だより」は2002年３月に発刊して以来、３年ぶりの「だより」となります。「市史」としての「だより」は創刊号になりますが、「村史」時代からの継続として『市史だより』と名称を変更し、今後も引続き発刊していきますので、ご指導・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

◆今回、『市史だより第８号』に掲載した「豊見城における初期の海外移民－『豊見城村史』の再検証を中心に－」（稲福政斉）は、現時点において市史係が収集した移民関係資料より抽出した豊見城出身者のデータをもとに、1964年刊行の『豊見城村史』に紹介されている豊見城の海外移民の先駆者や代表的人物に焦点を当て、いま一度検証を加えていく内容となっています。また、「豊見城市字与根の人生儀礼－産育と婚姻－」（儀間淳一）は市史『民俗編』の調査成果の一部を紹介したもので、出産前後から結婚までの間に行われる儀礼の報告をしています。【与那嶺】

豊見城市史だより　第８号

2005（平成17）年　３月31日

編集・発行　豊見城市教育委員会 文化課
901-0232　豊見城市字伊良波392番地
（豊見城市立中央図書館1階）
Tel　(098)856-3671
Fax　(098)856-1215

印　　刷　第一印刷株式会社

表紙題字：東暘適

文化課スタッフ

課長　天久光宏

市史係	文化係
係長　嘉数　浩	係長　大城　弘
主査　与那嶺豊	主事　大城竜也
嘱託　儀間淳一	臨時　仲宗根亨
委託　稲福政斉	
委託　福本恵子	